

## 片山廣子短歌研究

著者	清水 麻利子
学位授与大学	東洋大学
取得学位	博士
学位の分野	文学
報告番号	32663甲第465号
学位授与年月日	2020-03-25
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00011981/">http://id.nii.ac.jp/1060/00011981/</a>



氏名（本籍地）	清水 麻利子（東京都）		
学位の種類	博士（文学）		
報告・学位記番号	甲第 465 号（甲（文）第 55 号）		
学位記授与の日付	2020 年 3 月 25 日		
学位記授与の要件	本学学位規程第 3 条第 1 項該当		
学位論文題目	片山廣子短歌研究		
論文審査委員	主査	教授	博士（文学） 山崎 甲一
	副査	教授	博士（文学） 中山 尚夫
	副査	教授	博士（文学） 山本 亮介
	副査	鶴見大学教授	博士（文学） 山田 吉郎

## 学位論文審査結果報告書〔甲〕

### 〔審査報告〕

#### 概要

本論文は、近代歌人片山廣子の歌人としての業績を研究したものである。片山廣子は、佐佐木信綱主宰の短歌結社『心の花』の歌人として活動したが、併せてアイルランド文学翻訳家松村みね子としての顔をもつ。その翻訳においては森鷗外や上田敏らから高い評価を受け、中断する時期をはさみながらも晩年まで翻訳活動をつづけている。また、芥川龍之介に「才力の上にも格闘出来る女」と評され、芥川の最後の恋人「越びと」としても関心を集めてきた。こうした翻訳家としての活動や芥川との交流を視野におさめ、それらと関連づけた上で片山廣子の歌人としての活動と業績を解明している。

さらに、明治から昭和に及ぶ近代短歌史の展開の中で、片山廣子の短歌世界がどのように展開し、位置づけられるのかを探究している。廣子が歌人として活動したのは、新派和歌の発生から『明星』の浪漫主義、自然主義を経てアララギ派の隆盛、口語歌・口語自由律歌の流行、短歌におけるモダニズムの流入、戦後短歌へと至る時期にあたるが、そうした短歌史の潮流の中で、廣子の短歌世界がどのように展開していったのかを研究の基本的な視点として据えている。片山廣子には『翡翠』(大正五年)『野に住みて』(昭和二十九年)の二冊の歌集があるが、浪漫的で思索的であった第一歌集『翡翠』の歌風が、上記の歌壇の潮流と交わり、さらに先述のアイルランド文学翻訳の活動や、佐佐木信綱・芥川龍之介などとの交流、夫の死などの人生体験を経て、象徴性を含んだ平明な生活詠へと変容し、晩年の歌集『野に住みて』の歌風に至ると論者は捉えている。

本論文は、次の十章より構成されている。

- 第一章 片山廣子の短歌と芥川龍之介―芥川への書簡と歌稿に込めた再生への祈り―
- 第二章 大伴家持を詠む片山廣子短歌の考察―芥川龍之介宛書簡の短歌から繋がる歌心―
- 第三章 片山廣子の短歌『いさゞ川』から『心の花』へ―初期歌風の形成を巡って―
- 第四章 佐佐木信綱と片山廣子―廣子の信綱宛書簡と『心の花』歌稿を巡って―
- 第五章 片山廣子の短歌とアイルランド文学―遠きわたつみを夢見た「越びと」と芥川龍之介―
- 第六章 東洋英和女学院への片山廣子寄贈本から見えてくるもの
- 第七章 片山廣子短歌研究 われ―生くる我とゆめみる我と―
- 第八章 片山廣子短歌研究 家族―花のごとく木草の如く―
- 第九章 片山廣子短歌研究 死生観―おもひのままに生きて死なばや―
- 第十章 芥川龍之介・片山廣子短歌の創作と交流

右の十章の考察を通して、論者は『翡翠』から『野に住みて』への歌風の大きな変化を指摘する。(1)生活者としての体験からの人間的成長 (2)翻訳家として身に付けた伝わりやすい表現 (3)現実的な生きた言葉の世界から即興詩をつくり出す、アイルランド民謡からの影響 (4)生き方を模索する幅広い読書姿勢。これらにより『翡翠』の

「われ」を詠む夢想的な歌風は、『野に住みて』の「老境の文学」ともいえる象徴性を含んだ平明な生活詠へと変化してゆくと論者は捉えている。こうした考察をふまえて論者は、片山廣子短歌の独自性は、一貫して深い精神性を湛えた「われ」を詠む点にあり、時を重ねて、アイルランド文学翻訳家としての近代日本を先駆けた仕事や、文学的伴侶の芥川が名付けた「越びと」としての矜持が、廣子の「われ」の歌に厚味を加えていったと捉えている。

## 評価

以下、章ごとに論評を加える。

第一章「片山廣子の短歌と芥川龍之介—芥川への書簡と歌稿に込めた再生への祈り—」においては、従来吉田精一・辺見じゅんによって論及されていた片山廣子の芥川龍之介宛書簡と歌稿（高志の国文学館所蔵）を分析し、そこに片山廣子自らの再生への祈りが認められる点を指摘したところに新しさがある。前記吉田・辺見の論及は部分的な指摘にとどまっていたが、片山廣子・芥川龍之介両者の交流を概観し、詳細に分析した点は注目すべき業績である。芥川研究者の側からも評価されている。具体的な分析においては、とくに廣子の歌稿「追分のみち」中の「日の照りのいちめんにおもし路のうへの馬糞にうごく青き蝶のむれ」の歌に注目し、芥川の旋頭歌「越びと」に類想の作があることを指摘し、廣子が芥川の作に呼応した作と捉えた点は、両者の文学上の交流を実証している。さらにこの「青き蝶のむれ」のイメージが芥川の愛弟子でもある堀辰雄の『物語の女』中の情景描写にも取り入れられている点を指摘したのは、文学上の影響関係の一端を実証的に示している貴重である。

第二章「大伴家持を詠む片山廣子短歌の考察—芥川龍之介宛書簡の短歌から繋がる歌心—」は、「大伴家持の歌をよみかへす折ありて」と詞書を付す廣子の「ひばりの歌」十二首を、廣子が参照したであろう家持の作品とつきあわせる形で分析・考察したものである。この研究は今まで試みられておらず、本論文が先鞭をつけたものである。廣子の「ひばりの歌」の分析にあたり、廣子がふまえた想定される家持作品を抽出し、廣子短歌の特質を分析した点は近代短歌研究において評価できる。なお、今回の廣子短歌における大伴家持受容をはじめとして廣子の日本古典受容の全体像を明らかにすることが望まれる。古典研究の領域にはそれぞれ膨大な研究史の蓄積があるが、それをふまえて作品ごとの古典受容の過程を詳細に分析し解明してゆくことを期待したい。そのことはすなわち、近代短歌研究の側から古典受容に切り込むにあたっての視点と方法の問題を深めることに繋がるものであり、近代短歌研究の領域においてさらに探究されるべき課題と言える。

第三章「片山廣子の短歌『いさゝ川』から『心の花』へ—初期歌風の形成を巡って—」は、片山廣子短歌の従来未開拓の領域を研究した点で独自性を認めることができる。併せて、歌誌『心の花』創刊前史とも言うべき時期を掘り起こした点にも意義を見出すことができる。佐佐木信綱・治綱・幸綱と継承されてきている『心の花』は近代短歌史において重要な結社誌の一つであり、その史的役割にも大きいものがある。その『心の花』研究の未開拓の領域を切りひらいた論文としてその研究的意義には深いものがある。『心の花』研究を確実に一歩前に進めた業績と言える。さらに、『いさゝ川』掲載の片山廣子作品を

詳しく分析し、廣子の歌風が旧派的なものから近代の歌風へと移行してゆく過程を明らかにして、平易な詞と身近な素材で共感を得る廣子短歌の出発点がここにあるとする考え方は注目に値する。この時期の作品が第一歌集『翡翠』から除外されなければ廣子短歌の評価が違っていただであろうとする指摘は示唆に富んでいる。

第四章「佐佐木信綱と片山廣子—廣子の信綱宛書簡と『心の花』歌稿を巡って—」は、佐佐木信綱記念館所蔵の廣子の信綱宛書簡と廣子の歌稿を、鈴鹿市教育委員会の許可を得て資料紹介し、その片山廣子研究、『心の花』研究での意義を分析したものである。前章と同じく未開拓の領域を分析・考察したものであり、その研究史における意義は高く評価できる。片山廣子は東洋英和を卒業してまもなく佐佐木信綱の知遇を得、以後長年にわたり師として廣子の精神的支柱となっていたことを論じている。それは本論で紹介されている資料から、短歌創作上のことがらにとどまらず、学問や人生上のことがらにも及ぶもので、その師弟関係の一端を実証的に明らかにしたところに本論文の意義を認めることができる。論者の研究の特徴の一つとして、埋もれていた資料の発掘とそれを活用した論の展開の中で、片山廣子短歌の新たな文学的意義を提示する形式をなしている点を指摘できる。本章をはじめ先に見た第一章、第三章などの論文もこの視点から高く評価できるものである。

第五章「片山廣子の短歌とアイルランド文学—遠きわたつみを夢見た「越びと」と芥川龍之介—」は、片山廣子（筆名・松村みね子）が取り組んだ膨大なアイルランド文学翻訳の全体像を再検証して把握し、そこに再翻訳や新たな雑誌掲載作を発掘した点が高く評価できる。片山廣子のアイルランド文学翻訳に関する先行研究はすでに相当に蓄積されているが、その研究史をふまえた上で新たに文献探索に成果を得ているのは特筆してよいであろう。その上で、廣子の短歌活動にその翻訳活動がどのように反映していたのかを詳細かつ実証的に解明した点も評価できると考えられる。廣子の訳文を同時代の他の訳文と比較して廣子の訳文の特色を明らかにし、さらにその訳文と廣子の短歌作品との関連性を探究している。市井の生活に根ざす大胆な口語表現やリズム感豊かな会話文などが、廣子短歌にも反映しているとする指摘は重要である。なぜならば、折しも当時は短歌史において口語歌、口語自由律歌の台頭が見られ、廣子短歌にもその要素が見られるが、廣子の場合にはさらにアイルランド文学の訳業という他の歌人にはない要素が流入しており、短歌史を考える上にも重要な視座を形成しているからである。このほか、昭和二年の芥川の自裁が廣子の翻訳の中断の理由とする従来の説を修正し、廣子の翻訳の中断は昭和五年十一月に堀辰雄が芥川と廣子、娘の總子をモデルにした『聖家族』を発表した後であると指摘した点も注目される。

第六章「東洋英和女学院への片山廣子寄贈本から見えてくるもの」は、廣子が母校である東洋英和女学院へ寄贈した書籍百十四冊を分析し、そこから芥川龍之介・堀辰雄・与謝野晶子・佐佐木信綱らとの交流を跡づけ、その交流の意義を考察したものである。とくに芥川・堀を論じた部分は第一章、第五章で論じた廣子との交流を側面から補強するものとして一定の意義を有するであろう。また、この寄贈本から片山廣子の読書傾向を分析した点は新たな研究として意義を有すると考えられる。論者は、廣子の読書傾向の特色として文学的なものばかりでなく内面世界を深める方向を模索する点が見られるとし、日本古典や海外の文献など幅広く対象としていると論じている。とくに『良寛遺墨集』（安田靉彦

監修、昭和三年十一月、第一書房)に着目し、良寛の歌と廣子の歌を比較して、枕詞や倒置法の多さ、接続助詞「つつ」の多用などに共通点が認められるなど詳細な分析を行っているのは注目される。

本章付論「村岡花子宛片山廣子書簡(東洋英和女学院所蔵)からの考察」は村岡花子との交流を実証的に考察している。後に『赤毛のアン』の翻訳をする村岡花子に対して新しい時代を生きる女性を育てるためとして、支援を惜しまなかったという。その両者の交流を具体的に検証している点に意義が認められる。

第七章「片山廣子短歌研究 われ一生くる我とゆめみる我と」は、廣子短歌に形象化された「われ」の相克の特質を考察したものである。キーワードとして「鳥」「我」「心」「夢」「色」「動植物」「野」の七つを取り上げ、歌集『翡翠』と『野に住みて』収録歌からそれぞれ抽出して比較検討を加えている。それぞれ廣子作品を丁寧に分析しその特質を整理しているが、中でも「鳥」と「野」を論じた部分は好論であろう。前者では、飛び立ちがたい「われ」、耐えて待つことで受け容れる「われ」を「鳥」に仮託して表現していると捉え、廣子短歌のモチーフに根ざす論を展開している。また後者では「野」の歌を論じて芥川龍之介との交流の舞台であった軽井沢との繋がりを指摘しており、示唆に富んだ論を展開している。この部分はさらに掘り下げるべき研究上の鉱脈を有しており、今後の研究を期待したい。さらに、片山廣子短歌にうたわれた「われ」の特色については整理されているが、今後近代の女性短歌史の中での「われ」の詠まれ方を概観する視点に立ち、あらためて片山廣子の位置づけを定位してゆくことを望みたい。

第八章「片山廣子短歌研究 家族一花のごとく木草の如く」は、父母や夫、子を題材としたいいわゆる家族詠について考察を加えたものであるが、本章は論旨にまとまりと妥当性があり、廣子短歌の作品分析として一定の意義をもつと考えられる。近代短歌の領域にはいわゆる家族詠というものがあり、夫婦・親子・兄弟など家族をうたう作品には膨大なものがある。そのような家族詠の領域において、片山廣子短歌のうたう家族との強い関係性の特質は明確に分析されている。父母、夫、子をうたった作に分けて考察を加えているが、とくに夫と子を詠んだ作には廣子独特のものが見られることを指摘している。とりわけ夫をうたった作の中には堀辰雄の小説『物語の女』に題材として取り入れられているものがあるのを明らかにしたのは重要な指摘である。また、堀辰雄の文学仲間でもあった息子(早世する)を詠んだ歌も昭和の文学史の一頁と関連づけて論じられており、逸することのできぬ指摘を含んでいる。

このように、夫や子を詠んだ廣子の短歌作品は芥川龍之介・堀辰雄との関連をも視野に入れて捉える必要があり、そうした文学史の面からもアプローチすべき可能性を秘めた研究領域であることを示唆している。この点は、片山廣子短歌の研究が単に一人の歌人内部の研究にとどまらず、文学史へとひろがる可能性を蔵しており、注目したい。

第九章「片山廣子短歌研究 死生観—おもひのままに生きて死なばや」は、死生観を盛り込んだ短歌作品の分析がなされている。具体的には「生」「老・病」「死」「戦争・平和」「食」「暮らし・旅」「歌」の七つのキーワードに分けて分析・考察を行っている。前半の三節に相当する「生」「老・病」「死」を考察したところは全体としてまとまりを有しており、片山廣子短歌の重要な主題がどのように短歌作品として形象化され、推移しているかが精緻に分析されている。本章の標題とする片山廣子の死生観が明確化されてい

る点を評価する。後半の「戦争・平和」「食」「暮らし・旅」「歌」を論じた部分もそれぞれ要点が押さえられ、まとまった論をなしている。

第十章「芥川龍之介・片山廣子短歌の創作と交流」は、研究の少ない芥川龍之介の短歌作品を考察し、浪漫的歌風から生活詠や象徴的作品へと移行する過程を明らかにしたところに意義が認められる。さらに、芥川が短歌を詠みつづけた理由として、四点ほどを指摘しているが、中でも形式と韻律の追究、純粋な短編小説への模索をあげていることに注目したい。こうした志向はとりもなおさず晩年の芥川文学の在り方とも繋がるものであり、その晩年において短歌が芥川の内部で一定の重要な役割を果たしていた可能性を論者は提起していると言える。この提起は芥川研究において有益であろう。次に、芥川龍之介の文学の展開において片山廣子がどのような役割を果たしたかについては、芥川の旋頭歌「越びと」の創作や「詩的精神」の追究などが指摘できると論じ、重要な視座を提起している。とくに芥川の手袋自由詩（「手袋」）に片山廣子の存在が取り入れられているのではないかという指摘はきわめて示唆に富んだものであり、注目に値する。一方、片山廣子の側が芥川から受容したものについては、その芥川宛書簡や「日中」等の短歌作品の分析を通して解明されており、論者の研究成果として高く評価できると考えられる。

#### 〔審査結果〕

以上の通り、本論文は、片山廣子の芥川龍之介宛書簡や、東洋英和女学院寄贈の廣子の蔵書、廣子のアイルランド文学翻訳の資料調査など、広汎かつ綿密な資料調査に基づき、片山廣子短歌研究を多角的な視点から行ったものとして、同研究史において新たな視点を付与したと考えられる。とくに芥川龍之介・堀辰雄・佐佐木信綱・村岡花子との交流を明らかにした点、歌誌『いさゝ川』やアイルランド文学翻訳と廣子の短歌作品との相関性を明らかにした点などに当該研究史上の新見が認められる。

片山廣子研究に確かな指標を示した本論文は、文学研究科(日本文学文化専攻)の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であると認められる。

本審査委員会は清水麻利子氏の博士学位請求論文について、所定の試験結果と上述の論文審査結果に基づき、全員一致をもって本学博士学位を授与するに相応しいものと判断した。

以上